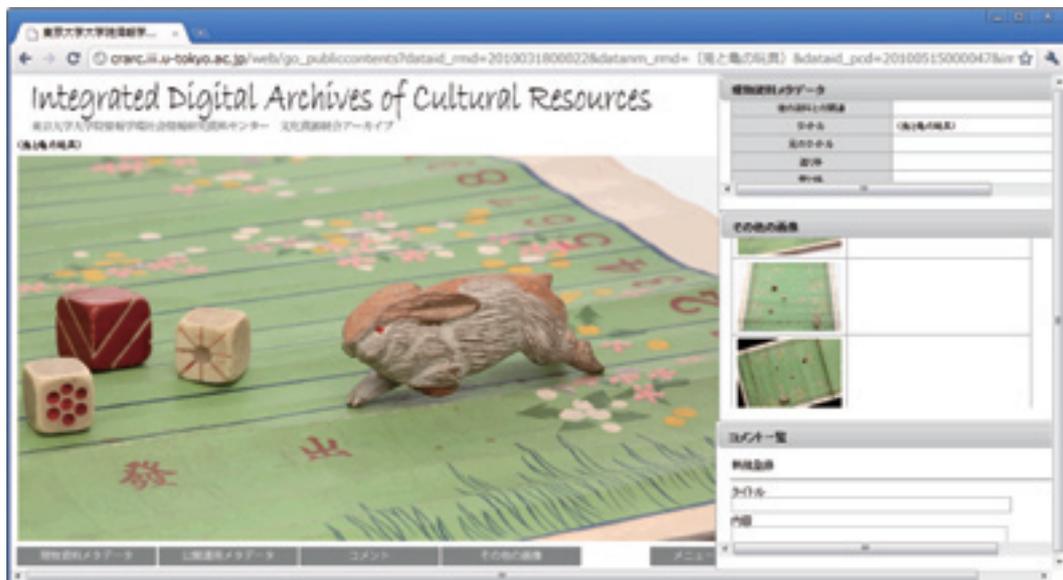


社会情報研究資料センターニュース

第 21 号 (2011. 3 月)

目次	大学における MLA 連携と社会情報研究資料センターにおける取り組み … 研谷 紀夫	1
	大井第一小学校寄贈漫画および児童文学資料について……玉井 建也・吉田 正高	5
	小野秀雄コレクションにおける幕末～明治初期の新聞資料……………福重旨乃	9
	Basil Hall Chamberlain old stock photography books …………… Soeno Tsutomu	11
	センター情報……………	15



(坪井正五郎考案玩具 兎と亀)

大学における MLA 連携と 社会情報研究資料センターにおける取り組み

研谷 紀夫

一、MLA 連携と大学

近年、博物館 (M)、図書館 (L)、文書館 (A) などにおける情報共有や横断的な利用の促進などを旨とした、「MLA 連携」の動向が世界的に顕著となっている。海外では 2000 年に英国で博物館・図書館・文書館国家評議会 (MLA: Museums, Libraries And Archives Council) が設立され国内の博物館・図書館・文書館の連携が行われた。また、EU を中心としたプロジェクトでは、27 ヶ国の博物館、図書館、文書館に所蔵される、合計 200 万点以上の資料がデジタル化され公開されている。その他にもスミソニアン博物館やユネスコにおいて、MLA の各機関を結びつけるプロジェクトが進行している。

日本では 2007 年に東京大学において「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館 - 連携に果たす大学の役割」が開催され、大学における三機関の連携を考える場となった。また 2009 年にはこれまで MLA の連携を推進してきたアート・ドキュメンテーション学会が中心となって、「MLA 連携の現状、課題、そして将来」が東京国立博物館において行われ、その場で国立国会図書館長、国立公文書長、独立行政法人国立文化財機構理事長の記念鼎談会が行われた。これらの成果は書籍としてもまとめられている。さらに NPO 法人「知的資源イニシアティブ (IRI)」が「日本の MLA 連携の方向性を探るラウンドテーブル」を複数回開催している。

このような博物館、図書館、文書館の連携が社会的にも大きな話題となって来ているが、具体的にどのような施策を行っていくかについては、今後多くの検討が必要である。そのため、本稿ではこれらの問題を考える端緒として既に同じ組織・機構内でこれらの機関が並列してきた大学における MLA 連携の意義とその可能性について検討してみたい。内外の規模の大きい大学では MLA の要素を備えた機関が並列されていることが多く、MLA の各機関が密接な関わりを持つことのできる可能性が高い。そのためここでは、大学における MLA の役割を「研究支援」と「教育支援」の二つの側面から考察する。

二、大学における図書館と博物館

大学における三機関の役割を検討する中で、鍵となる機関は図書館である。博物館や文書館が設置されていない大学は多数あるが、図書館のない大学というのは稀なケースであろう。大学にとって必須の機関とも言える図書館は、大学においてどのように使用されているのだろうか。多様な利用実態の全てを詳らかにすることは難しいが、その典型的な使い方について博物館と比較しながら考えてみたい。

元来、図書館に収蔵されている図書は既に調査や研究成果がある程度まとまった「成果集成」であり、基礎的な知識や先行研究の調査には有用であるが、図書に記述されたことのみを対象として新たな研究を成立させることは難しい。多くの学問分野では未発見の資料や、実験の調査結果などを踏まえて新たな知見や学説を発表していくことが求められる。研究過程における図書館の役割は、公知の研究結果や思考、記録、情報などを集め、理解するためにある機関であると言える。

一方で大学における博物館はどのような機関と言えるだろうか。博物館は、所謂「一次資料」を主に収蔵する機関であり、広く公刊された資料を扱うところではない。そのため、これまで研究の対象となっていない、新たな研究課題を形成できる資料を提供する場ともなりうる。

しかし、文書館や博物館においても、収集・整理の終了した資料は既に他の研究者によって基礎的な調査が行われた後の資料が多く、機関の紀要などに、資料の概略が紹介されていることが多い。無論、一つの資料から複数の人間が多様な研究成果を上げることは可能であるが、新規性や着目点の斬新さといった観点からみた場合、既に他の研究者などによって調査が行われた資料を扱う場合は、困難さがつきまとうことが多い。

また、不幸な場合は、機関に所属する研究者によって一定の研究結果が出るまで、外部の閲覧希望者に公開しないことも多く、それまで資料を閲覧できないことなどもある。このように大学において一次資料を扱う機関は、必ず

しも多くの研究者にとって、独創的な研究結果を出すことのできる資料を提供しているわけではない。むしろ、場合によっては、研究機関に所属するという性質故に、より閉鎖的になる場合も散見される。

このように、収蔵されている情報を基礎情報として可能な限り情報提供を行うことを使命とする図書館と、収蔵と研究を同時に行う面のある博物館などとの違いは、同じ研究機関の中にある組織としても異なる面がある。そのためこの違いが連携の阻害要因となることも十分に考えられる。以上のようにLとMに限ってみても「研究支援」を目的とした連携は、両者の運営実態や目的に応じて、よく検討を行って連携を模索する必要があるだろう。

三、教育基盤としての MLA 連携

一方で「教育支援」の側面からこれらの連携を考えると、研究よりもより効果的な可能性が見てくる。今更ここで述べることはではないが、大学の学部教育においては、初年度及び二年次などにおいて、人文科学・社会科学・自然科学などより幅の広い教養科目を習得する。この期間に習得できる科目は幅広く、各講義では各分野の基礎的な概要が示されよう。講義においては初学者向けの参考文献が示されるが、それらの本や講義においては、人文科学、自然科学、社会科学を問わず、各研究分野において使用された学術資料や調査結果、データなどが示される。従来の講義ではこれらは、教科書の中や板書や教授者の口頭での説明の中で示されるものであるが、これらを MLA 連携を活用して習得していく事が考えられる。

入口はライブラリーに収蔵されている書籍としながらも、それらに掲載されている人文科学における歴史史料や発掘資料、美術品や自然科学における標本、社会科学における統計資料などの資料を MLA が用意していくことによって、初学者に対してより実物資料を示しながら解説を行うことができよう。学問分野を問わず、これらの資料は MLA の各機関に分散していることが多く、これらを結びつけていくことが肝要である。

歴史学においても古代の考古学資料は博物館であるが、中世から近世・近代の資料は文書館に、さらに戦後の事件や事実については図書館の新聞やニュース雑誌などと、MLA を横断してみる必要がある。そのため課題やレポートなどにおいて、これらの学内の MLA 施設を横断的に見ることによって、俯瞰的な視点で、様々な学問分野につい

て考察できる機会を提供することができよう。またこれらを実現するためには、各機関が、そのようなプログラム向けに連携して、資料の準備などを行うことが望まれる。

また、これらをより効果的に連携させるのがデジタル技術である。無論デジタル技術が発達しても、現物資料の持つ質感や力は、デジタルコンテンツでは補完的できない面が多く、可能であれば物理的な資料に触れることが望まれる。しかし、網羅性や横断性を考えたとき、デジタルネットワークを使用してこれらの初学者向けの資料提供ツールとして活用してもらうことは有用な試みであろう。

昨今様々な議論があるものの、デジタルコンテンツを教材として使う試みが様々なところで行われている。デジタルコンテンツの表現力を用いて、様々な素材をとりこみ、よりわかりやすい教材を作成する試みである。これらの素材として、各 MLA 機関でデジタル化を行った資料素材などと連携をとることが可能となれば、多様な素材を活用した教材を構成することができる。図書館 (L) であれば既に著作権が消滅した書籍などを資料としてリンクをすることができ、博物館 (M) や文書館 (A) においては歴史史料や記録資料を引用し、歴史的な事実や出来事を示す上で裏付となる資料を示しながら、様々な出来事について解説することもできよう。また、自然科学分野においては実験のサンプルや機械のモデル、社会科学においてはデジタル化された調査結果のローデータなどを提供することで、これらのサンプルをもとに自分なりに実験・考察結果を検証することが可能になると考えられる。

またデジタル技術のインタラクティブ性を利用し、学生が MLA においてデジタル化された資料を使用して自ら教材を作成することも考えられる。このことによって能動的な学習が促進され、受動的な学習よりも、その分野における知識が深まることも考えられる。このような試みの中において MLA より提供されるデジタル化された資料は、既に MLA の枠組みを超えて、学問を横断的、俯瞰的にとらえる素材として、学生たちの知識形成に活用されるのではないかと考えられる。

以上のように考えると、大学における MLA 連携は、「研究支援」ではなく、まず「教育支援」より取り組んでいく方が、その目的に叶った効果をあげられると考えられる。そしてこれらの連携を行うことによって、各機関において蓄積された素材を通じ、学生たちが、MLA の垣根を越えて、基本的な知識を習得するための「場」となることが重

要であろう。

四、資料センターにおける MLA 連携

最後にそのような観点から情報学環社会情報研究資料センターにおける MLA 連携の試みを考えてみたい。同センターは新聞・雑誌資料を収蔵資料の中心としながらも、小野秀雄や坪井正五郎などの研究資料を含む、文書館 (A) 的な側面を持っている。また収蔵資料の中には、立体的なオブジェクトや錦絵などの、美術的な資料も含まれ博物館 (M) としての側面も併せ持っている。そのため、運営や資料の保存にあたっては、A と M の方法論を結びつけながら、図書室 (L) と連携しながら運営を行っている。利用をする研究者は、これらのセンターの特性を理解して、限定的な用途に基づいてセンターを利用しているのが現状である。しかし、センターが所蔵する資料の概要をより広く知ってもらうために、より若い世代にも、これらの資料に触れられる機会を作る必要がある。

現在、同センターにおいては、収蔵する資料と関わる学問分野を学ぶ初学者が、基礎知識を得やすいような横断的なデジタルコンテンツの作成を目指している。特に現在、当センターの高度アーカイブ化事業で取り組んでいる新聞学の祖「小野秀雄」の資料調査については、小野自身が集めた瓦版や錦絵新聞とともに、これまで所在が確認されていなかった幕末明治期の新聞や雑誌が再確認された。これらは小野が新聞の歴史について初学者向けに解説した「内外新聞史」などの著作に掲載されていた資料群である。これらの資料は、お互いに結びあわせていくことによって、

内外の新聞の歴史を知ることができる資料である。さらにそれらに加えて、小野の書籍や、錦絵など美術的な資料などを統合することによって、MLA の枠を超えて、新聞やメディア史の初学者向けの資料コンテンツを提供することができると考えられる。またこれらを、近年その用途が広がっているタブレット端末などで閲覧・演習することを可能とすることによって、小野秀雄資料を用いた様々なメディアヒストリーを模索・構築する場を提供することにもなると考えられる。

図1は現在開発中の資料センターのデジタルアーカイブの画面である。ここでは、資料に関わる様々な要素の関係が表示されている。各要素は MLA の枠を越えて手紙の草稿、書籍、記録、写真などが結びついている。そしてそれらのアイコンをクリックすることによって、図2や図3などの資料に結びつくようになっている。デジタルアーカイブ上ではこのように、これまでの MLA の枠を越えて、多様な使用を結びつけていくことができる。これらは、特定のテーマに焦点を絞った学術研究よりも、当該学問の基礎知識が全体の中での位置づけを学ぶ初学者には、全体像をわかりやすく把握できるツールとなるだろう。

このように、大学における MLA 連携は、これまでの各研究の蓄積や先行研究を紹介する教育支援を行う手段として用いることがより効果的であろう。そのことによって、若い世代が、各学問分野の基礎的な知識やその根拠となっている資料の概要を、MLA を連携しながら学び、そのことによって各機関の違いや、使い方も学び、自分でそれらを組み合わせて活用していく方法論を身に着けていくこと



図1 人、一次資料、雑誌などの様々関わりを示すトピックマップ
(情報学環社会情報研究資料センター文化資源統合アーカイブ より)

ができるようになるのではないだろうか。

(東京大学大学院情報学環特任助教：研谷紀夫)



図2 雑誌などの資料

(情報学環社会情報研究資料センター文化資源統合アーカイブ より)



図3 原稿などの一次資料

(情報学環社会情報研究資料センター文化資源統合アーカイブ より)

大井第一小学校寄贈漫画および児童文学資料について

玉井建也・吉田正高

はじめに

東京都品川区立大井第一小学校郷土資料室（現在は閉室）が所蔵する歴史資料の中に昭和30年代を中心とした少年雑誌の付録コミック本などがみられることが判明した。そこで2004年以降、東京大学大学院情報学環馬場章研究室の助力を得て、資料調査・整理、デジタル化作業を行い、2010年に大井第一小学校から社会情報研究資料センターへ寄贈された。以下、本資料の概要と特徴を述べていく。

一 資料の経緯および整理の概要

本資料は大井第一小学校の卒業生から郷土資料室へ寄贈されたものになる。寄贈の経緯等の詳細は判明していないが、当該期の子供たちがどのようなものに興味を持ち、また当該期の社会風俗を鮮明に表わすという点においても興味深い資料といえる。そこで前述のように馬場章研究室の助力を得て、2004年8月30日・31日両日に渡って、資料整理が行われた。図1から分かるように郷土資料室という部屋名の通り、郷土に関するパネル展示などが行われている部屋であった。その中に図2のようにコミックなどを中心とした児童文学作品などが陳列されていた。資料整理にあたっては次の手順で進められた。



図1 郷土資料室の様子



図2 郷土資料室の様子

①整理番号付与（図3）

資料全点に整理番号を付して行く。手順は以下の通り。

- a. 資料群に向かって左側から順に整理番号を付与してゆく。※整理番号は「001」から始まる3桁の数字とする。
- b. 予め整理番号を鉛筆で記した短冊型の和紙を、頁間に挿入する。
- c. 整理番号が付与された資料から順に、調書作成のために別室へ移動させる。



図3 整理番号付与の様子

②調書作成（図4）

- a. 机の上に白布を敷き、その上に資料を置く。

- b. 専用の調書に、資料一点毎の書誌情報を鉛筆で記入してゆく。
- c. 劣化が著しい資料が発見された場合は、薄様などを用いて養生を施す。



図4 調書作成の様子

③撮影

- ・デジタルカメラ

三脚にデジタルカメラを固定し、表紙および裏表紙の撮影を行う。なお、資料移動や調書作成など、作業中の様子も随時撮影する。

- ・デジタルビデオ

整理番号付与、調書作成など、作業の様子を随時撮影する。

④資料返却

作業が終了したら、郷土資料室へ資料を返却する。移動前の原状通りに資料を配置する。

以上の手順で資料調査および整理が進められた。手順内にて述べている調書であるが、従来の歴史資料（いわゆる古文書）の調査方法ではコミック類などに対応していないため、「番号、種類（コミック・児童文学・その他）、タイトル、サブタイトル、話名、内容小見出（付録）・収録話数（単行本）、流通形態（雑誌・付録・単行本・その他）、原作、作画、発行社、発行人、編集人、本誌（付録）・掲載誌（単行本）、発行年（刷版等）、巻月号、価格、ISBN、広告（自社・他社）、状態、表紙（カバー有無、カバー色、表紙色、表紙質）、料紙（材質、料紙色）、印刷インク色、寸法、装丁、頁数、版型、所有者、備考、記載日、記載者」といった点に留意して作成された。これらの作業はコミック、児童書、付録コミックを対象とした作業

であるが、資料群にはメンコも含まれていた。したがって、メンコに関しては以下のように対応した。

①分類

- a. メンコの裏面の情報（数字、トランプ、ジャンケン、文字、およびそのデザイン）を基に同種のを判別し、分類
- b. 同種の中でも裏面の数字の昇順によって分類
- c. 表面の絵柄などの情報で分類

②撮影（図5）

- a. 同種のメンコを最大5行×5列に並べて、表裏両面の写真を撮影（デジカメ使用）
- b. メンコは撮影後、種別毎に中性紙の封筒に入れた



図5 撮影されたメンコ（一部）

これらの作業を経て、2005年6月10日に大井第一小学校から東京大学へと寄託され、デジタル化の作業が行われた。

二 デジタル化作業

寄託された資料は、昭和30年代という時代性を反映し、強酸性の紙に劣化の激しいインクを用いて製作されているものが多い。したがって本資料をそのまま調査・研究へ活用するのではなく、劣化の激しい資料のデジタル化作業が行われた。しかし、そのほとんどが見開きでの撮影を行うとノド部分が破壊される可能性が大きいため、撮影台を斜めに固定し、資料を広げることで破壊を避けながら撮影

を行った。したがって右綴じのコミックの場合は、表紙から片面のみ（左側のページのみ）を撮影し、最終ページまで撮影した後は、撮影台を固定しているため、資料自体を上下逆に置き、裏表紙からもう片面のみを撮影するという手法で行った。全ての撮影が終了した後、画像データの向きなどを修正し、ページ順に見られるように統合した。

三 資料の概要

以上のように整理され、デジタル化された資料群の概要を述べていく。紙面の都合もあり別表は調書から仮番号とタイトルのみを取り上げてまとめたものになる。これらから把握されるのは、資料の多くが昭和20年代を中心に発行されたコミック、児童書、雑誌付録などである。一部の資料には所有者と推定される名前が7名記されており、聞き取りなどの調査で昭和19年から昭和30年にかけて大井第一小学校を卒業した人々であることが判明した。恐らくはこれらに代表されるように生徒が卒業後に学校に寄贈したものである。

全点数は145点になるが、コミックが74点と多くを占め、続いて児童文学・絵物語等47点、教科書等7点、その他雑誌・パンフレットなど17点となる。コミックは現在の単行本形態ではなく、74点中55点が雑誌の付録となっている。特に昭和20・30年代は漫画雑誌の創刊が相次いだこと、またそのほとんどの雑誌に付録として漫画がついていたことが特徴的であった。昭和21(1946)年に『少年』(光文社)、『漫画少年』(学童社)、昭和24(1949)年に『少年少女冒険王』(秋田書店)、『おもしろブック』(集英社)が創刊されるなど代表的なもの以外にも数々の月刊誌が世に送り出された。本資料もまたそうした同時代の動きの把握が可能であることをうかがわせる。

これらのコミックのうち手塚治虫作品が一番多くを占めており、11点になる。彼の人気をうかがい知ることが出来るが、同時代的には多数の作家が活動し、人気を得ていた(伊藤剛氏、宮本大人氏の研究を参照のこと)。手塚に次いで多くの点数が所蔵されていたのは有川旭一(あしかげ)の作品5点であり、その全てが『イガグリくん』であることも特徴であろう。これは福井英一(ふくいひでお)が昭和27(1952)年に『少年少女冒険王』で連載を開始した作品であるが、昭和29(1954)年に彼が急逝したのを受けて、有川によって連載再開されたものである。

これ以外にも鈴木光明(すずきあきみつ)作品(4点)、関谷ひさし(せきやひさし)作品(4

点)、馬場のぼる(うまのぼる)作品(3点)、入江しげる(いりえしげる)作品(3点)など作家数だけで50名を数えることも、当該期に多数の作家が活動し、またそれだけ読者に受容されていたことが理解できる。

もう一つの特徴として絵物語が挙げられる。そのなかで一番多く所蔵されているのが山川惣治(やまがわ そうぢ)である。戦前は紙芝居作品として確立され、前述の『おもしろブック』の看板作品であった『少年王者』が所蔵される山川作品の4作品中3作品を占めている。またコミックを含めて、基本的に少年向け作品が多数を占めるが、西條八十(さいじょう やじゅう)の『花物語』・『夕月乙女』、吉屋信子(よしかや のぶこ)『わすれなぐさ』・『伴先生』、またオルコット(olcott)の『若草物語』などどちらかといえば少女向けの作品が見られるのも特徴である。

おわりに

以上のように一部分の紹介のみであったが大井第一小学校寄贈資料の概要について述べた。これらの資料は当該期の社会風俗を色濃く反映している漫画や児童書といったものが中心であるだけでなく、卒業生から小学校への寄贈された点も見逃せない。時期的にもいわゆる悪書追放運動が沸き起こる以前に発行されたものが大半であることから、当該期の子供らがどのような作品を受容していたのか、そしてそれらを小学校へ寄贈すべきだと考えるものであったということなど、多くの示唆的な点を含んでいる。

<付記>

本研究において東京大学大学院情報学環馬場章教授、資料整理にご助力いただいた大島十二愛氏、倉持基氏、添野勉氏、土田健一氏、研谷紀夫氏、山根信二氏、資料撮影にご助力いただいた北川宏政氏、中村年孝氏、また大井第一小学校の皆さま、大井銀座商店街振興組合の皆さまには大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。本研究は「コミックのデジタル・アーカイブを地域文化資料として活用するための実践的研究 2005-2006年度科学研究費補助金若手研究(B) 研究課題番号17720150(研究代表者吉田正高)」の研究成果の一部である。なお、資料閲覧にあたっては社会情報研究資料センターの規定に沿うものとする。

(玉井建也・情報学環特任研究員)

(吉田正高・元情報学環特任講師、現・東北芸術工科大学准教授)

表 大井第一小学校寄贈資料一覧

No.	タイトル	No.	タイトル	No.	タイトル
001	純金の馬	056	丹下左膳	111	我が毒舌
002	カンラカラ兵衛①	057	ぼくらの歴史研究	112	トムソーヤの冒険
003	すみれさんのマスコット物語	058	イガグリくん	113	星の夜のゆめ
004	台風居士	059	こっけい巻物騒動	114	幽霊ホテル
005	水戸黄門の代官退治	060	ぜんぶ読切り探偵漫画ブック	115	若草日記
006	織田信長	061	直助物語	116	イガグリくんの決闘
007	童詩読本	062	復刻版尋常小学校国語読本巻1	117	小天狗小太郎
008	ジャングルブック	063	探偵王2月号	118	少年チャンピオン
009	めぐみちゃん	064	のんびり小僧の大流行	119	少年王者
010	謎の千両刀事件	065	オテナの塔	120	西遊記
011	わすれなぐさ	066	はりきり弁慶	121	イガグリくん
012	髑髏魔人①	067	あなたのヒットパレード新しい歌全曲集	122	白蠟仮面
013	天使の翼	068	ファビオラ	123	燈火の歴史
014	黒谷の魔人 魔人誕生篇	069	ピーターパン	124	少年王者
015	おはなし宝島	070	イガグリくん	125	ヴァイオリンの奏法
016	黒い峡谷	071	海洋童児	126	童謡絵本⑤
017	田宮坊太郎	072	漂泊の孤児 下巻	127	おもしろブック 10月号
018	丹下左膳	073	右門捕物帖	128	夏休みおもしろ宝鑑
019	レモン・キッド	074	荒木又右衛門	129	学習社会科図鑑
020	織田信長	075	青色ダイヤの秘密	130	僕ハ海鷲
021	未明童話集	076	人食岬の決戦ほか2編	131	山びこ三太
022	夕月乙女	077	空手太郎	132	楽しいぼくらの上野動物園
023	ライト兄弟飛行機発明物語	078	横綱レスラー東富士	133	少女名歌曲集
024	大岡越前守	079	子供極楽島	134	正月ゲームブック
025	ジャングル王子	080	(イガグリくん)	135	ところてんちゃん
026	島の灯	081	真田大助	136	中学生のための実力測定アチーブテスト
027	坊っちゃん	082	赤毛のリス	137	わんぱく若殿 茶々若丸
028	からくり小判	083	イガグリくん	138	きのみ くさのみ
029	世界を滅ぼす男	084	少年四天王	139	サンデー毎日
030	若草物語	085	柿の木峠の物語	140	疾風小四郎
031	ぼくらの西洋史	086	伴先生	141	化石人間
032	仮面魔	087	怪獣男爵	142	社会科参考産業交通 日本地図
033	山の章太郎	088	花物語	143	鉄腕リキヤ
034	ひよどり天兵	089	右門おてがら帳	144	お江戸のくりちゃん①
035	少年ニッポン	090	氷の処女	145	メンコ (515点)
036	ロケット太郎	091	怪力雷電		
037	世界名作童話集	092	友情の小径		
038	黒帯くん	093	宮本武蔵		
039	山びこ学校	094	熱砂の魔王		
040	イガグリくん	095	神変どくろ岩		
041	山びこ学校 (表紙部分)	096	銀星		
042	山びこ学校 (表紙部分)	097	めぐみちゃん		
043	幽霊馬車	098	蟻地獄谷の決闘		
044	美しき港	099	少年王者		
045	はやぶさ頭巾	100	鉄腕アトム		
046	賤が岳の名槍	101	珍傑三勇士		
047	八犬伝	102	活劇映画ブック		
048	幕末剣光録坂本龍馬	103	日本映画		
049	幾何学基礎論	104	ひまわり		
050	アパートちゃん	105	太平洋X点 (ポイント)		
051	イガグリくん	106	少年西遊記		
052	ドン・キホーテ	107	照り降り姫		
053	思い出の虹	108	鯛雲		
054	織田信長	109	鉄腕アトム/新人類フウムーン		
055	大洪水時代	110	落語全集 松の巻		

小野秀雄コレクションにおける幕末～明治初期の新聞資料

福重 旨乃

はじめに

東京大学情報学環図書室では、東京大学新聞研究所初代所長であった小野秀雄（1885～1977）の旧蔵資料を保管している。その内容は瓦版・錦絵・新聞・蔵書・ノート・原稿など多岐にわたり、現在までに数回の資料整理が行われた¹。今回の資料整理では、これまでに整理された資料について、一点ごとにメタデータを付して目録を作成している。今回の整理の過程で幕末～明治初期の新聞資料の存在が明らかになった。

1. 小野秀雄コレクションの中の幕末～明治期の新聞資料

整理の過程で明らかになった幕末～明治期の新聞資料は〔表1〕のとおりである（2011年3月1日現在）。これらの新聞資料の形状は、現在の新聞とは異なり、和綴じの冊子となっている。小野秀雄コレクション中の幕末～明治初期の新聞資料のうち、貴重なものを1、2点取り上げたい。

表1 小野コレクション中の幕末～明治初期の新聞資料

新聞名	年号	西暦
中外新報 第1・2号・第2巻第1号・4号～12号	咸豊 8	1858
格林沁・殷兆鏞上書 香港新聞	万延 1	1860
中外襍誌 第1・2・5号	同治 1	1862
官板 バタヒヤ新聞 1～5（巻1～12）・巻22・23	文久 2	1862
官板 海外新聞	文久 2	1862
海外新聞 全		1867
万国新聞紙 初・3・4～6・9集	慶応 3	1867
阪府 外国事務日誌 第1号	明治 1	1868
万国新聞紙 第1～3	慶応 4	1868
日々新聞 第1・5・7・9・13・16・18輯	慶応 4	1868
中外新聞 第8～37号	慶応 4	1868

公私雑報 第1～14号	慶応 4	1868
各国新聞紙 第1集	慶応 4	1868
京都府日誌 第14	明治 1	1868
湊川濯餘 第1	慶応 4	1868
明治元年戊辰・明治二年己巳 東京城日誌	明治 1	1868
江湖新聞 第1～22号	慶応 4	1868
遠近新聞 第11～15号	慶応 4	1868
官許 市政日誌 第1～3号	慶応 4	1868
江城日誌 第1～15	慶応 4	1868
太政官日誌 第2～11・13～20・41・47～56	慶応 4	1868
官許 市政日誌 第2号	慶応 4	1868
もしほぐさ 第1～42篇	慶応 4	1868
外国事務 全	明治 1	1868
都鄙新聞 第1号	明治 2	1869
肥前藩日誌 2号	明治 2	1869
官版 海外新聞 4～12・15～17・36～38・41～49号	明治 3	1870
名古屋新聞 第1・2・5～8号	明治 4	1871
万国新聞 第6号	明治 4	1871
日注雑記 第2号	明治 5	1872
愛知新聞 第9～11・18・30・37号	明治 5	1872
峡中新聞 第1・3号	明治 5	1872
官許 開化新聞 第17号	明治 5	1872
東京日日新聞 第75・877号	明治 5	1872
日新真事誌	明治 5	1872
横浜毎日新聞	明治 5	1872
岐阜新聞 第6号	明治 6	1873
広島新聞 第25号	明治 6	1873
琵琶湖新聞 第26・44号	明治 6	1873
愛知週報 第15・16・18号	明治 6	1873
埼玉新聞 第12～15号	明治 6	1873
郵便報知新聞 第43・53号	明治 6	1873
官許 鳥取県新報 第9～13号	明治 6	1873
明治六年第四月 博覧新聞	明治 6	1873
千葉 新聞輯録 第1・8号	明治 7	1874
明六雑誌 第36～43号	明治 8	1875
平仮名絵入新聞	明治 8	1875
開化之栞 第1～6号	明治 8	1875
中外評論 第1～11号	明治 9	1876

¹ 小野秀雄の略歴、コレクションの整理の経緯及びその活用については矢野美沙子「小野秀雄コレクション及び周辺資料の活用」（センターニュース第20号，2010年3月）に述べられている。

2. 中外新報

『中外新報』は中国清朝の咸豊帝の時代（1851～1862）に発行された新聞である。『中外新報』は米国人宣教師の Daniel Jerome MacGowan（中国名：瑪高温）および後任の Elias B. Inslee（中国名：応思理）が編集し、中国寧波で発行された初の中国語新聞であるといわれる²。

小野コレクションにある『中外新報』は「浙甯 応思理撰」とあり、創刊初期のものではなく、Daniel Jerome MacGowan 後任の Elias B. Inslee（応思理）によって編集されものであることがわかる。また、返り点や助詞等が印刷され、出版者が「老皂館 東都堅川三之橋 萬屋兵四郎」とあることから、小野コレクションの『中外新報』は、寧波の『中外新報』を日本語版として発行されたものである。

小野コレクションには『中外新報』が第1～12号（咸豊8～11 = 1858～61）が残されている。表紙は黄色で、題箋には「官版 中外新報」および西暦と清朝の年号が記されている。寸法は縦227mm、横142mm前後である。内容としては寧波を中心とした中国国内のニュースおよびアメリカをはじめとした国際ニュースが記されている。

3. 官板バタヒヤ新聞

『官板バタヒヤ新聞』は幕府の翻訳業務を担当した蕃書調所（のちに洋書調所、開成所。東京大学の前身）が発行

した初の日本語新聞である。アヘン戦争後の国際情勢の複雑化によって、それまで幕府に献上されていた和蘭風説書にかわって献上された新聞紙を翻訳したものである³。出版者は先の『中外新報』と同じ「老皂館 東都堅川三之橋 萬屋兵四郎」である。

小野コレクションに含まれる『官板バタヒヤ新聞』は一～五（巻1～12）および巻22・23で文久元・2年（1861・62）の発行である。表紙は薄茶色で、題箋には「官板バタヒヤ新聞」および出版年月日（和暦）および巻数が記されている。寸法は縦227mm、横158mm前後である。内容は海外情勢についての報告である。

おわりに

今回の整理を行う資料は15,000点余りで、現在三分の一程度の整理が完了している。整理の過程で、書籍や雑誌のほか、小野秀雄のノートや原稿、新聞記事のスクラップ、江戸時代の絵図、戦時中資料や欧米各国やアジア諸国の資料、各大学新聞や地方新聞の創刊号等が見つかった。現在は整理作業の途中であり、今後も貴重な資料が発見されると思われる。今後は整理作業を進めていくとともに、多岐にわたる小野秀雄コレクションの全貌を解明していきたい。

（福重旨乃・情報学環特任研究員）



『中外新報』第1号 咸豊8年（1858）11月



官板バタヒヤ新聞 二（巻4～6）文久2年（1862）年1月

² 卓南生「寧波『中外新報』（1854-1861）の編集方針と報道姿勢」（『国際社会文化研究所紀要』第10号 2008年6月）

³ 日本新聞博物館編・発行『新聞のあゆみ－明治から現代まで』2006年5月

Basil Hall Chamberlain old stock photography books

Soeno Tsutomu

1. Four old photo books in the 19th century

In 2008, Multi-media and Socio-information Studies Archive (MSSA), Interfaculty Initiative in Information studies, The University of Tokyo bought four old printed photograph books to research a visual culture of the Meiji era. These books are supposed to belong to Basil Hall Chamberlain (1850-1935) — the first professor of the department of Japanese of the Imperial University (present department of literature of The University of Tokyo) —. They are high definition photography books with colotype print made by Ogawa Kazumasa (1860-1929). He is one of the most famous studio photographers from the middle of the Meiji era to Taisho era, and probably his photo books were widely sold in general market. Although has been published for 120 years, the photographs on these book have no sign of degradation.

Each large photo books entitled *SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan*, *The Hakone District*, *SCENES FROM THE CHIUSHINGURA AND THE Story of the Forty-Seven Ronin* and *The Volcanoes of Japan* represent Japanese landscapes and cultures in the middle of Meiji era, including short explanations in English. Moreover, the publisher is printed on the three out of four photo books as KELLY & WALSH Limited. It can be inferred from these books that the publishing company which had distribution route all over the world — in Asia, Yokohama, Shanghai, Hong Kong and Singapore — issued them for foreign residents and travelers to Japan.

In this paper, I would introduce outline of these photograph collection and Chamberlain. Next I will examine Ogawa Kazumasa who took and printed various pictures on these books. Finally, I investigate the photo culture before the diffusion of printing technology of photography at the end of the Meiji era.

2. Basil Hall Chamberlain

Basil Hall Chamberlain was born as serviceman's son in Britain, and he came to Japan in 1873. As foreign advisors hired by the Japanese government, he taught English at a naval academy a year after he arrived. He conducted studies on Ryukyu, Ainu and other languages

which made him become the first professor of Japanese and Hakugen-gaku (current linguistics) of the Imperial University in 1888. As a professor, he brought up several eminent scholars. He had vigorously researched until leaving Japan in 1911.

According to a certain research, Chamberlain had about 15,000 books in his personal library (Akasaka Bunko). A part of historical materials related to him is kept in The National Archives of UK, Public Record Office and Aichi University of Education (B.H.Chamberlain and T.Sugiura Collection). In addition, at this university, a part of his beautiful 6,000 postcards is opened to public.

Chamberlain wrote many tomes and dictionaries in Japan. For example, *A Handbook of Colloquial Japanese* (1888) is a basically typical text of Japanese grammar, and *Things Japanese* (1890) is the first encyclopedia about Japan. He wrote a lot of books that introduced Japanese language and culture for foreigners. Especially, *A Handbook for Travelers in Japan* (John Murray, 1891) written with W.B.Mason was reprinted as many as nine times and became an indispensable book for traveler to Japan.

It is easy to imagine that Chamberlain acquired some photographs and photo books published at that time as materials of Japanese culture, however, these four

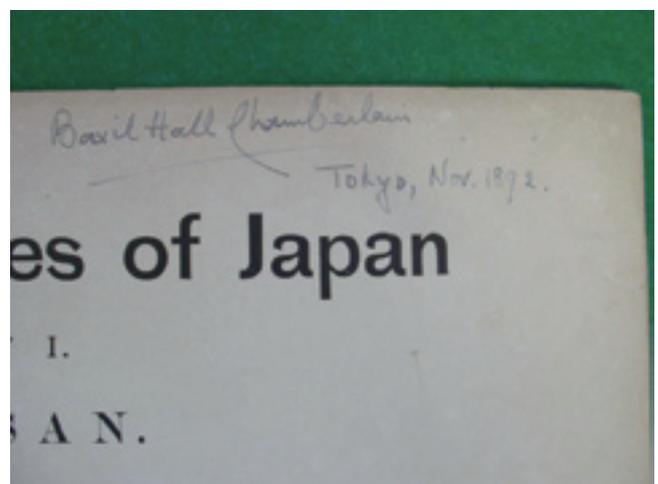


Fig.1 B. H. Chamberlain's signature
(*The Volcanoes of Japan*)

books are valuable samples since they have the owner's signature and autograph description (Fig.1).

3. Contents of photo books

3 - 1. *SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan*

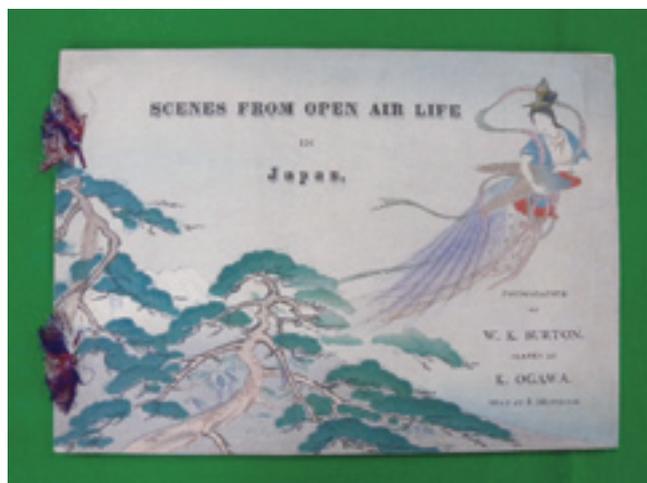


Fig.2 *SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan*



Fig.3 Hucksters by the foot-path on Ginza.
(*SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan*)

Actually MSSA has four Chamberlain's photo books; however, due to limited space, I will introduce only three. First, *SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan* (Fig.2) is rectangular large size photo book which has fourteen pictures taken by William Kinninmond Burton (1855-1899), and Ogawa Kazumasa printed by collotype. James Murdoch (1856-1921) — known as a person who taught English to the young Natsume Souseki — took charge of the content of this book. The cover art is an exquisite celestial maiden flying out from Mt. Fuji. This book has neither colophon nor information about publisher; however, from the peculiar printing type at the

cover, it can be assumed that this book was published by KELLY & WALSH Limited.

Burton who took all photographs appearing in this book is a foreign specialist for public works hired by the Japanese government. He had an extensive knowledge and a wide variety of interest including photography. He is a superior photographer known as a member of the Royal Photographic Society of Great Britain. He played an important part in Nihon Syashin Kai (Japan photography association, the first association of private photography enthusiast in Japan) organized in 1889. Moreover, he had a deep friendship with Ogawa Kazumasa, Burton introduced Ogawa to the Royal Photographic Society of Great Britain and supported him to be the first Japanese who get the title of F.R.P.S.. In 1891, Burton took some photos at the disaster area of great earthquake in Aichi; then, Ogawa printed and published in the title *The Great Earthquake in Japan, 1891* with collotype print. Published year of *SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan* is not clear, but is surmised around 1892 based on their relationship and publishing business.

The large size photographs in this book are all taken in Tokyo. Each photograph has a short description which is one or two lines caption and few pages of explanation. In the first half of this book, there are five scenes of flower viewing of Ueno and Mukoujima; three scenes of Asakusa Sunday market and laborers. Next, two pictures entitled "Children playing around the well" (children's daily life) are printed in this book. Furthermore, there is one photograph entitled "Asakusa — A Komori (Girl-nurse)". In the latter part of this book, there are photos showing street vendors of Ginza (Fig.3) along with Asakusa and scenery of Ryouunkaku and many event flags entitled "The Shows of Asakusa". The feature of the photograph in this book is to pay attention to Japanese people's daily life in those days. Murdoch wrote "It is the scope of this album to depict stray sights and scenes culled from the plethora of this open-air Tokyo life" in the preface, these photographs are inferred to gather and edit determinedly.

3 - 2. *The Hakone District*

The Hakone District (Fig.4) is a photo book of Hakone, a very popular place among foreigner at that time. This book is large and long in length with seventeen pictures. Murdoch is written on the cover of the book as an author same as *SCENES FROM OPEN AIR LIFE IN Japan*. According to the colophon, it was published on September 10, 1892. Ogawa kazumasa took charge of the print-

ing and publishing, and Tokyo Tsukiji Type Factory is listed as the printers. Considering the collotype technology used in this book, it is no doubt that Ogawa was responsible for photo printing. In addition, this book follows general design of Ogawa's photograph books at the time; it is supposed that he sold the same kind of books serially.

The most important point of this book is the map of Hakone revised by Chamberlain's own handwriting (Fig.5). On the woodblock color print map in this book,

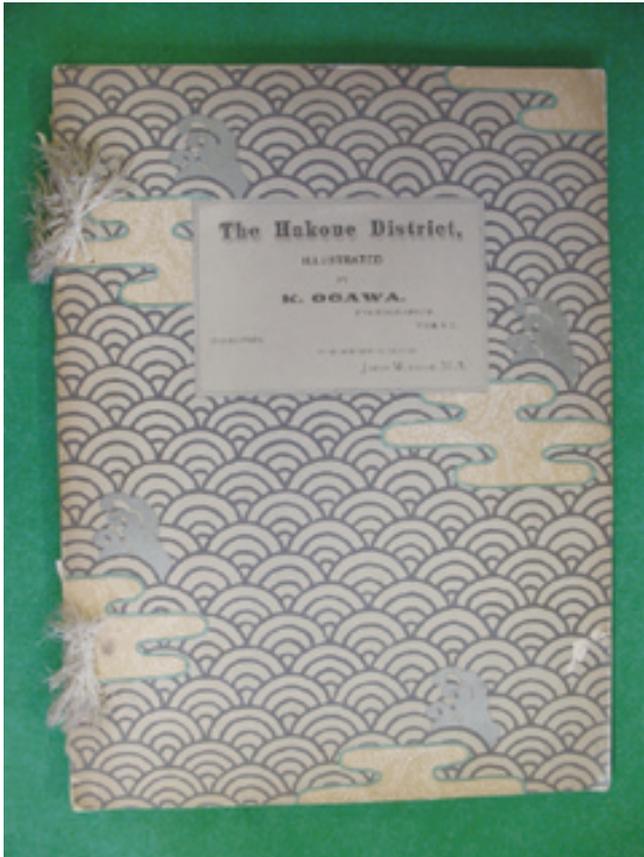


Fig.4 *The Hakone District*

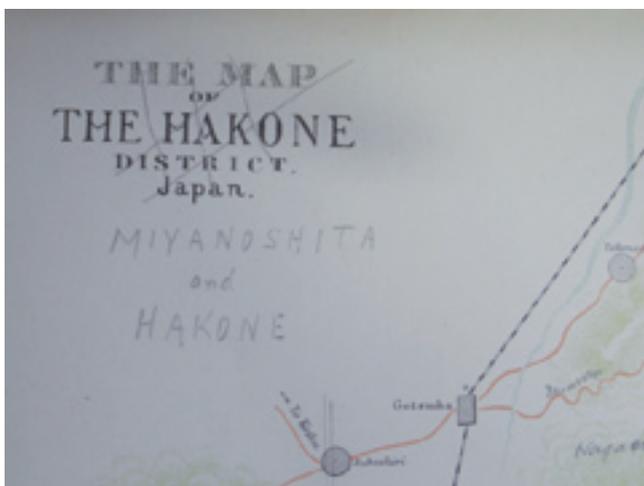


Fig.5 Corrected page (*The Hakone District*)

it is written "THE MAP OF THE HAKONE DISTRICT"; however those words are crossed out corrected as "MIYANOSHITA and HAKONE" by handwriting. From various corrections to name of place on the map, it can be surmised that he knew this area well enough at that time.

All printed photographs that shooting scenic landscape of Hakone in this book resembles "Yokohama Shasin" (Japanese souvenir photography for foreigner). It has been described that pictures are taken by Ogawa; however, Ogawa himself stated in the book that some of them were taken by Burton and Kusakabe Kinbei (1841-1934) — the President of huge factory of "Yokohama Shasin" — .

3 - 3. *SCENES FROM THE CHIUSHINGURA* *AND THE Story of the Forty-Seven Ronin*



Fig.6 *SCENES FROM THE CHIUSHINGURA*
AND THE Story of the Forty-Seven Ronin



Fig.7 Harakiri of Lord Aasano
(*SCENES FROM THE CHIUSHINGURA AND THE Story of the Forty-Seven Ronin*)

of the *Forty-Seven Ronin* (Fig.6) is almost the same design and size as *The Hakone District*. According to the colophon, the author is Murdoch and most photographs are taken by Ogawa Kazumasa. Published on December 17, 1892, there are fifteen large photos by Ogawa and two pictures by Kajima Seibei (1866-1924), one of the most famous photographers at that time and he had connection with Ogawa.

The pictures on this book start with the stage photo (Fig.7) showing a scene of Harakiri (suicide) of Lord Asano who committed bodily injury in the Edo castle. However, after that are series of tomb photos of Ako Roshi (heroes of this story) at Sengaji, Tokyo (from plate 1 to 4). Especially plate 4 is a picture of Daibutsu, a typical Japanese landscape which has no relationship to this story. After plate 5, printed photos return to stage photograph again; then, they narrate the story from the beginning to the end.

The same sort of this photography book is in the possession of International Research Center for Japanese Studies entitled *DORAMA OF FORTY SEVEN RONINS*. All pictures in this book are all colored. Particularly, the blood color paint is quite lurid on Harakiri scene. These photo books are printed by collotype at Ogawa's factory from 1892 to 1895 and sometimes colored by hand.

4. Photo books of Ogawa Kazumasa

In addition, *The Volcanoes of Japan* (Fig.8) is rectangular large size photo book, published by KELLY & WALSH Limited. This book uses Mt. Fuji as the theme and was published after the book published by Ogawa Kazumasa Shuppan-bu (publishing house) on the same subject (H.G.Ponting, *Fujisan*, October 1905).

Thus, many photography books were published from 1890s to 1900s, and a person who attempted to utilize technological innovation and expand the shooting subjects was Ogawa Kazumasa. He brought back the latest

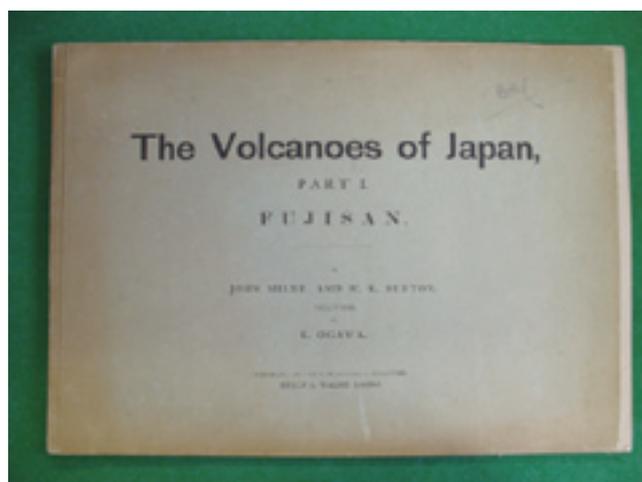


Fig.8 *The Volcanoes of Japan*

printing technology from U.S.A. to Japan in 1880s, opened a large-scale collotype printing company with photo studio "Gyokujun-kan"; made and sold high definition printed photo books for foreigner mainly during the first half of 1890s. Then, in the latter half of 1890s, the trend of photo books shifted to more cheaper and smaller, Ogawa changed his shooting subjects to war and current topics. He understood customer's taste and adjusted the components of his photography. From these four photo collections, we can realize his earliest attempt concerning photo book.

Until recently, it was not clear that who are the target groups of these photo books at that time. Hence, the discovery of Chamberlain old stock photography books proves that hired foreigners were the readers of these books. Further discovery and analysis is needed in the future.

(Soeno Tsutomu · National Museum of Ethnology, Visiting Researcher (Former research associate, Interfaculty Initiative in Information studies, The University of Tokyo))

センタ－情報

■社会情報研究資料センター長

平成 22 年度 情報学環学際情報学府 吉 見 俊 哉

■社会情報研究資料センター運営委員会委員

平成 22 年度の委員の方々です。

吉 見 俊 哉 (委員長 情報学環学際情報学府)
 馬 場 章 (副委員長 情報学環学際情報学府)
 山 本 博 文 (史料編纂所・情報学環学際情報学府)
 中 野 公 彦 (生産技術研究所・情報学環学際情報学府)
 林 香 里 (情報学環学際情報学府)
 丹 羽 美 之 (情報学環学際情報学府)
 西 兼 志 (情報学環学際情報学府)
 金 成 玫 (情報学環学際情報学府)

■ホームページの全面リニューアル

Web サイトを全面リニューアルし、利用案内や蔵書検索など、目的のページにアクセスしやすいデザインに一新しました。メディアに関わるオンライン・データベースの一覧や展示室・デジタルアーカイブの紹介も掲載しています。



本センターの利用に関する情報提供だけにとどまらず、研究成果も発信中です。研究成果の1つ「デジタルカルチュラルヘリテージ構築のためのガイドライン」は、PDF版で全文をご覧ください。

■情報文化学会学会賞受賞

本センターの研谷紀夫特任助教と添野勉元特任助教(現国立民族学博物館 外来研究員)が情報文化学会学会賞を受賞しました。受賞の対象となったのは、情報学環「21世紀COE:次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」及び「情報学環社会情報研究資料センター:高度アーカイブ化事業」におけるユビキタス・テクノロジーを活用した次世代アーカイブの構築に対してです。同賞の授賞式は2010年11月20日に東京大学山上会館にて行われました。

■センター提供によるデータベース一覧

- センター閲覧室端末で利用可能
 - ・日経テレコン
 - ・The Times Digital Archive 1785-1985
- 全学で利用可能
 - ・Proquest Historical Newspapers
 - ・American Film Scripts
 - ・Film Indexes Online

東京大学大学院情報学環
 社会情報研究資料センターニュース
 第 21 号

発行日 2011. 3. 31 発行
 編集・発行 東京大学大学院情報学環
 東京都文京区本郷 7-3-1 TEL 5841-5905
 印刷 三鈴印刷株式会社
 東京都千代田区神田神保町 2-32-1 TEL 5276-0811
 E-mail tosyoy@iii.u-tokyo.ac.jp
 ホームページ http://www.center.iii.u-tokyo.ac.jp